

神戸グローバルチャレンジプログラムシンポジウム実施報告

—世界へ飛び出す学生たち～Global Challenge from KOBE～

1. シンポジウム概要

1.1 シンポジウム実施趣旨

神戸大学の「神戸グローバルチャレンジプログラム（以下、「神戸 GCP」とする。）は、2015 年、文部科学省「大学教育加速プログラム（AP）テーマIV長期学外学修プログラム（ギャップイヤー）」（以下、「AP」とする。）事業に採択され、4年目を迎えた。本プログラムは、1, 2年次学生が国際的なフィールドでの学外学修活動で、学びの動機付けを得ることを目標にしており、教育の国際通用性の強化、質向上といった本学の教育改革の中に位置づけられ、それらを加速することを意図している。

2016年度より、主として海外での学外学修へ学生の送り出しを開始し、これまでに延べ38コースを実施し、約330名の学生が参加した。

今回のシンポジウムは、神戸 GCP に参加した学生が、「何を学び、その学びをどのように発展させ、国際的なフィールドでの更なる挑戦に繋げているのか」といったこれまでの取組を振り返るとともに、その取組と成果を広く社会に発信することを目的に開催した。

1.2 シンポジウムのキーコンセプト

「世界へ飛び出す学生たち」をキーコンセプトに、当日のプログラムは、学生による学外学修の活動とその学修成果に関する報告発表を軸に構成した。

発表に当たっては、神戸 GCP に加え、本学のグローバル人材育成に向けた特色ある2つの取組についても取り上げた。

1つは、国際人間科学部のグローバル・スタディーズ・プログラム（以下、「GSP」とする。）で実施された、附属小学校と連携した海外学修活動を盛り込んだ教育プログラムである。そしてもう1つは、スーパーグローバルハイスクール（SGH）指定校である附属中等教育学校が、「グローバルキャリア人」の育成を目指して展開するグローバル・アクション・プログラム（以下、「GAP」とする。）に参加した生徒の海外学修活動である。

このように、本学のグローバル教育の全体としての取組の一端を示すことにより、大学全体として、今後、グローバル教育を持続的に展開、発展させていく上での課題を検討する機会とした。

1.3 実施日程と当日プログラム

本シンポジウムは、2018年11月3日（土）、本学の百年記念館六甲ホールにて開催した。当日のプログラムは、次のとおりである。

13:00 開会挨拶

13:05 第1部 基調講演 「海外学修プログラムと学士課程教育」

1. 我が国におけるギャップイヤーの活用と大学教育の質保証
2. 経済界が求めるグローバル人材とは
3. 異文化体験が若者をどう育てるか
4. 「日本の大学生」の受け入れと国際交流の意義

14:30 ポスターセッション

15:00 第2部 各プログラム参加学生による発表

- 神戸 GCP
 - ・グローバルチャレンジコース—学生企画型（ネパール）
 - ・インターンシップチャレンジコース（インド）
- GSP
 - ・オーストラリア・ブリスベンのアイアンサイド小学校訪問プログラム
- GAP
 - ・カンボジア研修

16:15 第3部 パネルディスカッション 「海外での学びをどう活かすか」

- ・第1部講演者と第2部登壇学生によるディスカッション

17:00 総括と今後の展望

2. シンポジウムの内容

2.1 開会挨拶

始めに、本学の藤田誠一教育担当理事より、当日プログラムと神戸 GCP について次のような紹介があった。

まず、神戸 GCP の趣旨は、大学に入学してからできるだけ早い時期に世界を経験してもらい、いい意味でのショックを受けて帰国してもらうことにある。その経験から学生自身が、何ができ、何ができないのか、何をしなくてはならないのかを認識した上で、その後の大学生活を送ることを目的としている。つまり、何を経験したかは重要であるが、その後の学生生活にどう活かしたかということがより重要である。

続いて、神戸 GCP の大きな3つの特徴が紹介された。

- ① 1・2年次の学生を対象にしたプログラムであること
- ② 総合教養科目の単位として単位授与していること：

国際的フィールドでの活動を単に“経験”するだけではなく、経験を通じて何を学ぼうとするのかを活動前に明確にし、また、戻ってきて何を学んだかを振り返る。これ

らを含めた学修成果を評価している。

- ③ 部局が企画する学外学修コースのほか、学生自主企画型コースがあること：
学生がどこへ行き、どのような活動に取り組みたいかという希望を基に、オーダーメイドのコースを設けている。

その後、本シンポジウムで取り上げる本学のグローバル化を推進する特色ある取組として、国際人間科学部の GSP、附属中等教育学校の GAP の紹介があった。

2.2 第1部 基調講演「海外学修プログラムと学士課程教育」

2.2.1 基調講演1 「我が国におけるギャップイヤーの活用と大学教育の質保証」

○講演者：河本 達毅氏

(文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室改革支援第二係長)

最初に、文部科学省高等教育局の河本達毅氏より「我が国におけるギャップイヤーの活用と大学の質保証」と題し、講演があった。

まず、AP と「テーマIV長期学外学修プログラム (ギャップイヤー)」について紹介があった後、グローバル化と大学教育の役割を明確に示された。以下、講演の概要を記載する。

(1) グローバリゼーションと大学教育

1990 年以降、グローバルリゼーションが非常にインパクトを持ち続け、大学にも非常にインパクトを与えている。

人、情報、経済が日々、国境を越え、すごいスピードで移動する昨今、国際化が進み、知識基盤社会の時代となり、産業・職業構造（職業社会）も変化した。

キャリア形成面で、学生にとって、大学は職業との接続という点で重要である。グローバルであらゆるものが動くという時代、大学もそのような移動を前提とした教育へ変わらねばならないのではないかという社会からの期待もある。

大学は、職業の多様化に伴い、学生の多様なニーズに対応する必要があり、産業界からもそれぞれのグローバル展開に対応できる人材養成を求める動きがあるため、グローバル人材を育成することは、大学教育で重要になっている。

(2) グローバル人材とは

主体的に物事を考え、多様なバックグラウンドを持つ同僚、取引先、顧客等に自分の考えを分かりやすく伝え、文化的・歴史的なバックグラウンドに由来する価値観や特性の差異を乗り越えて、相手の立場に立って互いを理解し、新しい価値を生み出すことができる人材だと考えている。

(3) グローバル人材に求められること

経済産業省は産業界の見解として、「社会人基礎力」（アクション、シンキング、チーム

ワーク)、文部科学省は「学士力」(知識・理解、汎用的技能、態度・志向性、統合的な学習経験と創造的思考力)を重要としている。

(4) 大学の人材育成に求められること

2012年、中央教育審議会がまとめたところでは、「グローバル化の加速する社会において活躍できる人材育成」を重要としている。これは英語が話せるという意味ではなく、自国の歴史や文化に関する知識や認識をしっかりと持ち、多元的な文化の受容性があること、そして、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験といったものをしっかりと身に付けていく学生を育てることであり、大学の責務である。

(5) ギャップイヤーと人材育成

先に述べたような人材を目指すには、大学のキャンパスの中だけでは完結しない。学生がキャンパスの外に出て、色々な体験を通じて学ぶことが重要である。そのためには、この活動を行う期間を作り出す必要があった。そこで、日本の大学でもギャップイヤーの導入が推進され、クォーター制などを取り入れ、学外での学修活動に集中的に取り組める期間を作ることにについて検討が始まった。

(6) 学外学修の推進が大学にもたらすもの

学外学修は、現在求められている人材育成に非常に意味があり、大学改革の一端を担うものとなると考えられる。

3・4年次の大学での学び、教育効果を高めることが期待されるので、なるべく早い段階で学生を学外に送り出す。また、1か月以上のまとまった期間に集中的に行われる学外学修活動は、数日間のものよりも高い教育的効果が期待できる。こうして得られる学生の学びの成果は、大学のアカウンタビリティを高め、大学教育の質保証に繋がると言える。

2.2.2 基調講演2 「経済界が求めるグローバル人材とは」

○講演者：池田 全徳氏

(株式会社日本触媒相談役)

次に、株式会社日本触媒相談役の池田全徳氏より「経済界が求めるグローバル人材とは」と題し、グローバル人材として求められる能力について、講演があった。

日本触媒では、企業に入って海外で活躍する機会として、事務職・技術職・研究職いずれの分野の社員も、海外駐在・商談・海外での子会社設立・海外研究機関への派遣や共同研究といった形で海外へ派遣されることがある、との例が挙げられた。その後、その際に求められる能力について、以下のように、ご自身の経験を交えながら具体的に言及された。

(1) グローバル人材に求められる能力

①理解力、②交渉力、③判断力・決断力、④柔軟な考え方(先入観を持たない)、⑤語学力、⑥一般教養である。中でも①、②、③が最も重要かつ不可欠で、とりわけ海外駐在で

すぐに求められ、若手には一番重要である。

(2) 理解力

日本では職位がそれほど高くない若手であっても、海外駐在となると、いきなり管理職を任せられることになる。管理する立場で必要になるのは、国によっての習慣の差もある中、相手の言うことをしっかり理解できるということが重要となる。

(3) 交渉力

これは、相手の主張を理解した上で、論理的に分かりやすく説明することが必要となる。特に日本人は、日本人同士だと気分で分かるので曖昧に済ませたり、後でまた言えばいいやとしてしまったりすることがあるが、海外ではこれは通用しない。はっきり物事は言わねばならない。また、自分と意見が違ったときは、即座にそれは違うとはっきりと自分の意見を主張しなければならない。

(4) 判断力・決断力

海外にいると軽微な案件から重要なものまで、様々な案件が舞い込んでくる。案件処理をする上で、決断を先伸ばししていると業務が滞ってしまう。必要があれば上長や関係者と相談、1人で決断できることは速やかに処理することが求められる。

以上の能力は、社会人として当然、備わっているべき能力なので、学生時代にこれらの能力を高めてほしいと思う。

(5) 柔軟な考え方（先入観を持たない）

これは1つに人種的な偏見を持たないということが挙げられる。つまり、どんな相手に対してもまずは対等に付き合い、相手の能力を見定めることが必要だ。なお、これについては国によって習慣も異なるので、渡航前に情報収集もできるが、実際に現地に触れないと本当のことは分からないものである。

(6) 語学力

英語が話せることに越したことはない。多くの国で知的レベルの高い人は英語を話す。そのため英語で意思疎通を図ることは大切だが、仕事に関しては通訳を雇うこともできる。

英語とは別に、駐在国の言語で挨拶や日常会話は少し話せるように努力した方がよい。現地の人とのコミュニケーションは大切だからだ。駐在先で、日本人で徒党を組んでいたのでは、現地の文化、言葉も学ぶことはできない。

理解力、論理的に説明する力や判断力の方が語学力より求められる。

(7) 一般教養

最後に、一般教養も軽んじてはならない。社会に出て、外国人から日本の文化等、日本のことを聞かれた時、簡単でよいので説明できる教養は身に付けていただきたい。

また海外で、例えば美術館で絵を見たとき、事前に知識があれば、より関心を持って鑑賞できたり、現地の人との話題にもできたりする。英語が話せても、一般教養がないと底の浅い人間と思われ、軽く扱われることもあるので、一般教養は重要だ。そのようなこと

からも、若い間に身につけていただきたいと思う。

(8) 若い世代へのメッセージ

若いときに海外に行き、現地の人と触れ合い、様々な人の資質を見るという経験をすることは、今後のグローバル社会で非常に重要でないかと思う。

若い人たちは、理解力、論理力、判断力・決断力、一般教養を身に付け、思い切って海外へ飛び出していただきたいと思う。

2.2.3 基調講演3 「異文化体験が若者をどう育てるか -未来志向の教育実践として-

○講演者：堀江 未来氏

(立命館大学国際教育推進機構教授、立命館小学校・中学校・高等学校代表校長)

続いて、立命館大学国際教育推進機構教授、立命館小学校・中学校・高等学校代表校長の堀江未来氏より「異文化体験が若者をどう育てるか -未来志向の教育実践として-」と題して、講演があった。

まず、ご自身が大学時代、立ち上げられた異文化交流サークルや中国での留学経験を基に、異文化体験が人の成長にどのように重要かを述べられた。

その後、変化の激しい時代、未来の世の中を生きていくための準備として、小中高生、大学生が国際的に開かれた人間になる、グローバルな力をつけていくことが、これからの変化の激しい将来を幸せに生きていくために必要であり、1人の自立した大人として生きていくために身につけておいてほしい必須のことだとされた。そして、いくつかの観点为例に、この必要性を示され、国際教育の取組が目指すものについて述べられた。以下にその概要を記載する。

(1) 未来という観点から

2030年の社会は、VUCA（変動的、不確実、複雑、不明確）の時代と言われている。いつの時代も将来のことは不明確だが、今後、ますますグローバル化が進み、多様性、想定外のことが増大すると予想されており、明らかに今の世の中と2・3年後、5年後、10年後は大きく社会も変わる。

また、AIに象徴される科学技術の飛躍的な進展による社会的便益とリスクの増大は、脅威でもあり、希望でもある。こういった世の中の変化について、改善面よりも、不安感を呼ぶ出来事や変化ばかりがクローズアップされる傾向がある。

ここで小中高生に伝えたいことは、悪い世の中に向かうわけではなく、技術の進化やグローバル化が進むことは、よくなっていくことでもあると捉えてほしいことである。

かつて研究滞在した台湾、淡江大学で「未来学」というものに出会った。これは、未来を予測するだけでなく、自分たちがどのような社会にしたいかという思いを投影し、それを実現するためにどうしたらいいか考える学問とのことだった。教育においても、社会変

化に応じて、それに合わせた教育ではなく、どのような世の中にしたいかという意志を子どもたち自身が持つような教育が大切だと思っている。この文脈でグローバル化は必ずあると考えている。

(2) 教育改革で目指す人材像の観点から

人材像として、「想定外」、「板挟み」に向き合い乗り越えられる人材、創造的・協働的活動を創発し、やり遂げる人材といったものが挙げられている。これについて大事だと思うのは、主体的に学び続ける学修者の育成だ。これから変化が激しくなっていく世の中で、新しいことをどんどん学べる。どこまで学んだから完成ということではなく、ずっと進化させていける力が非常に重要だと思う。

(3) OECD の Education2030 が掲げる「Learning compass (学びの指針)」の観点から

「学びの指針」で、重要だとされる3つのコンピテンシーが挙げられている。それは、「新しい価値を創造する力」、「緊張とジレンマの調整力」、「責任を取る力」だ。

それぞれの要素や力は、異文化体験を通じて身につくと考えている。

異文化体験を通じて身につく可能性のある力を、研究仲間と非認知能力リストとして作っているが、その中には、先の2氏の講演に挙げたものもある。また、最近言われる立ち直る力（レジリエンス）、ストレスコントロール、感情のコントロールなども含まれる。

ただ、こうした力は海外から行って帰ってきたら身につくというわけではなく、やはり教育的な支援が必要だと思っている。そのため、BRIDGE Institute というグループを立ち上げ、現在、教材開発などを行っている。

(4) 国際教育の取組が目指すもの

国際教育の取組が目指すものの中で、個人的にこだわりを持っていることは、自文化中心主義を乗り越えることだ。

人は自分が属す社会に適合して育ち、生きる。そのため、自分のやり方が普遍的だと思うことはごく自然な傾向ではあるが、文化が異なると、基準も異なる。そのことをどう受け止め、自文化中心主義からどう抜け出すかが一つの教育課題になる。

ただし、人は目に見えたもの、聞こえているものがそのまま頭に入るのではなく、大事なこと、知りたいこと、知っていることに関連でしか頭に入ってこないという指摘もあり、これは意識すれば乗り越えられるというものでもない。

(5) 自文化中心主義の次に何があるのか

重要なのは、文化的相対主義だ。自分の文化を多様な文化の一つに位置づけ、物事や事象を多角的に捉えることができる段階である。これは異なる文化の人々の間の橋渡しの役割ができるようになると同時に、自分は新しいことを学び続ける存在であると考えられる段階だ。

(6) 国際教育の意義

立命館小学校国際教育のパンフレットにも新たに書いたのだが、海外研修は「ちょっと

辛くて面倒くさい」要素が欠かせないと思う。事前・事後の学習を含め、異文化体験の学びを全人教育として最大化することが大事だ。そして、多様性に関わった人権感覚と感性を持ち、グローバル社会で自立した個人として幸福感をもって歩んでいけるということが大切だ。

(7) 国際教育において大事なこと

2点ある。1つは、学生が多様だということだ。年齢、それまでの海外体験、性格、どのような学びや取組をしたいかなど、いろいろな面で子どもたちは異なるので、そこへの注意が必要だと思う。

もう1つは、指導する立場にある者は、海外で高度な取組ができる生徒や学生に対し、プラスアルファで何が提供できるか考える必要もあるが、そもそも自文化中心主義を乗り越え、文化的相対主義へと導く側が、生徒、学生をしっかりと導ける段階にいるかを顧みる必要がある。私たち教職員は、生徒や学生よりも一歩でも先にいなくてはならない。そのための努力をしていかねばならないと感じている。

2.2.4 基調講演4 「日本の大学生」の受入れと国際交流の意義

○講演者：ティン・エイ・エイコ氏

(「ティンミャンマー」日本語学校校長/ミャンマー神戸大学同窓会会長)

最後に、「ティンミャンマー」日本語学校校長、ミャンマー神戸大学同窓会会長のティン・エイ・エイコ氏より「日本の大学生」の受入れと国際交流の意義」と題し、講演があった。

日本に留学して以来、ミャンマーと日本の「架け橋」としての役割を意識するようになり、さらに、グローバル化が進んだ現在、この「架け橋」は、日緬二国間だけでなく、様々な人が触れ合うグローバルな観点での交流という意味合いも持っていると言われた。

ミャンマー帰国後の日緬の様々な交流、事業等で橋渡しをされたエピソードが紹介された後、2011年のミャンマー神戸大学同窓会が発足後、2013年から毎年、本学のインターンシッププログラムや異文化理解型のフィールドワークプログラムで、学生たちの受け入れをされている。これまでの受入れの状況と成果について、そして、今後への期待などを話された。以下、講演の概要を記載する。

(1) 日本の学生受入れとその成果（インターンシッププログラム）

研究分野が言語であったことから、ミャンマーに帰国してからも日本語や「言葉」に関する仕事に携わっている。その関係で、インターンシッププログラムでは、日本語、日本事情教育補助のインターンを受入れてきた。

具体的な業務として、授業のティーチングアシスタント、日本語授業の教材作成のほか、出版予定のミャンマー人の日本語学習者向けの漢字辞書等の校正業務がある。インターンシップをした学生の中には、ミャンマーでの経験を通じて日本語教育への関心がさらに高

まり、国際交流基金で海外日本語教育機関へ教師として派遣されている者もいる。

学生にとって日本語教育やその現場について見識を深める機会となる一方、ミャンマー人の日本語学習者にとっては、ネイティブから日本語を学ぶ機会となり、日本語の辞書を編纂する者にとっては、日本語を母語する者と編纂作業を行え、双方に大きな成果となっている。

(2) 日本の学生受入れとその成果（フィールドワークプログラム）

これは様々な活動を通じて、急速に変化するミャンマー、多民族社会を肌で感じることで異文化理解を深化させるプログラムである。

活動内容としては、日本大使館や JICA、JETRO といった日系政府機関へ訪問し、ミャンマーの政治、経済、社会概況を学ぶことである。また、ヤンゴンの日系企業には、神戸大学の卒業生が多く駐在しているので、卒業生の企業を訪問し、ミャンマーで展開している事業や現地ビジネス事情について説明を受けたり、キャリア形成に関するインタビューを行ったりする。そのほか、神戸大学との協定校であるヤンゴン経済大学をはじめいくつかの国立大学を訪問し、現地学生と交流を図り、学生同士で刺激を受けるなど、多角的な活動を行っている。

(3) 今後のミャンマーと日本の繋がりと期待すること

急速に変化するミャンマーは、今後、日本との繋がりがますます強くなり、日系企業の存在感が増すことが見込まれる。そのため、ミャンマーにきた日本の学生が今後、ミャンマーとどのような関わりを持っていくかということに注目している。そして、様々な分野で両国の人材が、力を合わせて、良い成果へと導いていってほしいと思う。

そのために、日本とミャンマー、両国の若者たちの交流を通じ、これから互いの国のために何をしていきたいか、何ができるかを見出せるような国際交流をすることを期待している。これを実現するために、学生たちがこういうことをして欲しい、こういうことをしましょうと互いに提案、意見交換ができるような人材交流をこれからも続けていきたい。

2.3 第2部 学生の活動成果報告発表

第2部では、神戸 GCP、GSP、GAP に参加した学生・生徒が、計4つの学外学修活動と学修成果に関する発表を行った。各プログラムに参加した学生・生徒は、参加動機から活動内容、そして参加経験がその後の学生生活や将来への希望にどのように影響を与えているかを報告した。

これに先立ち、本プログラム実施責任者である本学の阪野智一教授より、神戸 GCP、GSP、GAP の概要説明があった。

神戸 GCP に関しては、開会挨拶で藤田教育担当理事、基調講演で文部科学省河本氏が触れられているので、ここでは GSP、GAP について概要説明を記載する。

<GSP>

2017年4月、従来の「国際文化学部」と「発達科学部」を再編統合した「国際人間科学部」の取組である。

環境、災害、移民・多文化共生、経済格差、開発協力、人権、教育、福祉、少子高齢化などのグローバルイシューを深い人間理解と他者への共感を持って解決し、世界の人々が共存できる「グローバル共生社会」の実現に貢献する人を養成することを目的として展開されている。

3つのカテゴリーに分類されるコース（実践型GSコース、研修型GSコース、留学型GSコース）では、100以上の海外派遣プログラムが実施されており、同学部に在籍する学生は、卒業までに全員いずれかのプログラムに参加することが必須となっている。

<GAP>

神戸大学附属中等教育学校は、2015年よりスーパーグローバルハイスクール（SGH）の指定を受けており、GAPはSGHとしての取組の一環である。

GAPは「急速にグローバル化が加速する現状を踏まえ、社会課題に対する関心と深い教養に加え、コミュニケーション能力、問題解決力等の国際的教養を身に付け、将来、国際的に活躍できるグローバル・リーダーを育成すること」を目的に、グローバルリーダーセミナーのほか、国内外で交流プログラムが実施されている。

2.3.1 <神戸GCP> グローバルチャレンジコース—学生企画型（ネパール）

○発表者：大家 広之（法学部4年）

まず、2016年度に、神戸GCPに2年次で参加し、ネパールの現地NGOでボランティア活動に取り組んだ法学部4年生の大家さんが、活動報告とともにネパールでの経験がその後のキャリア選択にどのように活かされたかについて発表を行った。以下、大家さんの発表概要である。

(1) 参加動機

神戸GCPへの参加動機は3つある。学生時代に海外での活動に挑戦したい。そして、国際機関への就職も視野に入れていた当時、自分のキャリアについて具体的に考えたい。さらに、専攻している国際政治について学びを深めたいという希望があった。また、自ら活動計画を立て、実行できることを魅力に感じ、学生企画型のコースに応募した。

(2) 現地での活動内容

活動先は、困難な状況下にいる子どもの保護活動を行っているネパールの現地NGOのCWIN¹である。CWINで関わった活動は、公立学校支援事業と子どもの保護育成事業だ。

¹ Children Workers in Nepal の略称。

また、自分で企画した活動プロジェクトも行った。

<公立学校支援事業での活動>

ネパールの公立学校を取り巻く教育環境は、ハード面もソフト面も厳しい。教科書は3人で1冊を分かち合ったり、先輩が残した数冊の教科書を使い回したりすることもある。また、ネパールは、2015年に大地震に襲われ、校舎が使用できなくなった学校では、子どもたちは簡素なプレハブ校舎で学ぶことを余儀なくされている。

そんな子どもの学習環境を整備する活動の一環として、公立学校で家庭等に問題を抱える子どもとの面談をし、CWINの相談員と解決策を思案したりする。また、真新しい制服を支給するといった支援物資の提供に従事した。

そのほか、CWINスタッフと教員がタイアップして、子どもとの意見交換に立ち会ったり、学校の抱える問題について話を聞いたりする機会もあった。

<子どもの保護育成事業での活動>

CWINが運営するHELP LINEという、通報を受けた子どもたちの保護施設でも活動をした。家庭や生活に問題を抱え、保護された子どもたちは心身ともに傷を負っている。ここで子どもたちは衣食住の提供を受けるとともに、学習面の支援も受ける。また、音楽やダンスを通じ、健全な精神を育む試みがなされている。その音楽、ダンスの時間を子どもたちと共に過ごした。

厳しい環境に置かれてきたせいか、人に対し強い警戒心を示す子どもたちだったが、彼らの目線に立って接し続けたことで、少しずつ歩み寄ってくれ、うれしく感じた。

<自主企画プロジェクトの実施>

渡航前に準備をした2つの活動、大縄跳びプロジェクトとメッセージ・リレー・プロジェクトを学校やHELPLINEで実施した。

大縄跳びプロジェクトは活動先4校で行った。20回飛ぶことを目標に、仲間と協力する大切さを指導した。学校の教員、CWINの他のボランティアの協力を得、活動は大好評だった。

メッセージ・リレー・プロジェクトは、子どもたちに自分の未来像を描いてもらう活動だ。これは、困難な状況にある子どもたちにも前向きな目標を持ってほしいというのが狙いで、学校、幼稚園、HELPLINEで行った。

学校では、道徳の授業として、画用紙に各々の未来像を書き、クラスで共有した。また、幼稚園では自由に絵を描いて表現してもらった。

そして、HELPLINEでは、言葉が通じない中、これまでの活動を通じ信頼関係を築いてきた甲斐もあり、画用紙に雑誌の切り抜きでコラージュしたり、カラフルに色づけしたりなど、創意工夫にあふれたメッセージリレーをすることができた。

それぞれの取組では、言葉の壁がありながら、身ぶり手ぶりでコミュニケーションを取り、子どもの目線に立つ姿勢はNGOスタッフにも高く評価され、自信に繋がった。

(3) キャリア選択に大きな影響をもたらした出来事

ある日、活動からの帰途、ストリートチルドレンに足を掴まれた。ぼろぼろの服を着て、冬にも関わらず素足で、髪の毛は砂まみれでうつろな表情をしていた。自分の足を離すまいとしがみつき、「マネー」と訴えた。自分の腰ほどの背丈の子どもだったが、恐怖感を覚え、その場を離れた。だが、子どもの保護に関するボランティア活動に参加しながら、目の前にいる子どもが救えない己のふがいなさが、ただただ残った。

(4) ネパールでの学び

学校での活動では、子どもとともに問題に向き合う大切さを学ぶ一方、ネパールの公立学校が抱える現状を見せつけられ、NGOの努力だけでは現状改善に限界があり、課題の解決は一筋縄ではいかないことを痛感した。

また、ストリートチルドレンとの出来事では、厳しい現場で目にする光景やその時抱く感情は想像を超えている。教科書を読んだだけでは分からない事実がある。実際に自分の目で見る、確かめる大切さを知った。

(5) ネパールでの経験を経て～キャリア選択

日本も同様に、世の中には目を背けたくなる現場があるという大きな課題を前にして、現場の力だけでは解決に至らない実情がある。

活動を終え、自分の考えが少し変化した。それは、現場の地道な努力は欠かせないものだ。だからこそ、現場の苦労や限界を受け止める理解者が必要だと思うようになった。

4月から新聞記者として働くことが決まっている。ネパールでの体験から、市民目線のを忘れずに記事を書きたいと思っている。当事者にしか分からない苦労や思いを社会に繋げたい。現場と社会の架け橋になる記事を書きたいというのが、今後の目標だ。

2.3.2 <神戸 GCP> インターンシップチャレンジコース (インド)

○発表者：中山 芽与 (農学部2年)

次に、今年度のインターンシップチャレンジコース (インド) にて、デリーにある日本語学校で8~9月にかけて約1ヶ月間、日本語日本事情教育補助のインターンシップに取り組んだ農学部2年の中山芽与さんが発表を行った。中山さんの発表概要は以下のとおりである。

(1) 参加動機

昨夏、同じく神戸 GCP の農学部が実施する農学英語コースにて、フィリピンの UPLB² で英語学修やフィールドワークに取り組んだ。UPLB の学生達とも活動する中で、フィリピンの様々なことを教えてもらう良い経験となった。

² 正式名称は University of the Philippines Los Baños.

そのため、今年の夏もどこかで挑戦したいという思いがあった。かねてからインドに興味があり、また日本語を教えることにも関心があったのが応募動機だ。

(2) インターンシップ業務について

デリーにある日本語センターでのインターンシップ業務は、基本的に朝の10時から夜の7時までだった。

生徒は高校生から社会人まで様々な年齢層の人がおり、家庭環境としては、中流の一般的な家庭の人が多かった。彼らが日本語を学ぶ目的も様々で、会社で日本語が必要な人や、日本のアニメに興味を持ち、日本語を話したいという人もいた。生徒の殆どがいつか日本に行ってみたいと話し、意欲的に学んでいた。

インターン業務にあたり、注意されたのは、インターンであっても生徒と先生という関係をしっかり築かなければならないということだった。インドはカースト制度があるので、馴れ合いの関係になると、指導ができなくなるからだ。

業務は、教材作成、授業補助、日本事情指導と3種類ほどあった。

教材作成では、授業で使用する漢字のカードや絵カードなどの教材を作成したり、英語の文章に日本語訳を付けたりした。仕事の量が多く、日本語訳のミスが許されないのので、いかに効率よく、正確にこなすか工夫しながら作業を進めた。

授業補助としては、日本語をかなり修得した人のクラスから日本語を学び始めた人のクラスまで、様々な日本語レベルの授業に入り、字の書き方を教えたり、日本語会話の相手になったりした。授業に入ることで、休み時間などに生徒から日本語で話しかけられるようになり、教える喜びを感じた。

そして日本事情指導としては、大勢の生徒の前で、日本についてのプレゼンテーションを英語で行った。これは改めて自分の国についても考える良い機会になった。

いずれの業務も大変だったが、その分やりがいも大きかった。

(3) 現地での生活、文化体験

デリーでの日常生活では様々な体験をした。移動には地下鉄を利用し、インドは映画産業が盛んなので、映画を観に行ったり、インドの地方料理など様々な食べ物を食べたりした。そこで気付いたことは、どれも渡航前にイメージしていたインドとは異なっていることだった。

また、インドの観光地と言えば、ガンジス川やタージマハルなどしか知らなかったが、デリーだけでもたくさんの観光名所があり、インドの歴史を学ぶことができた。

(4) 自分が感じたインド

今回、私が最も衝撃を受けたのは、インドは国内の格差が大きいということだ。同じデリーの中でも、人や牛がその辺に寝ていたり、電線に洗濯物が干されていたりと混沌とした地域もあれば、日本でも見かけるような近代的なショッピングモールや高級レストランが立ち並び、物価もとても高い地域もある。それほど距離も離れていないところに、正反

対の世界が広がっているのが衝撃的だった。

(5) インドでの経験を通じて成長した点

今回、成長したことは4つある。

まず、英語力だ。滞在していたホステルでは英語でのコミュニケーションが必要不可欠だったので、ジェスチャーなども使って、自分の意見を伝える力がついたと思う。

次に行動力だ。UPLB のときと異なり、1人での渡航であり、またインターンシップの活動以外は自由だったので、充実した滞在にしたかったこともあり、週末や空いている時間は、周囲に情報を尋ねたり、調べたりして、色々な場所を訪れた。無論、周囲から助けをもらうこともあったが、自ら計画し、足を運んだことは自分への自信にもなった。

それから仕事のマナーや業務への姿勢だ。日本語センターでのインターンは、当初思っていたよりも大変だったが、ビジネスマナーや仕事をする意義や姿勢を学ぶことができた。

そして最後に、価値観や世界観だ。日本語センターやホステルで様々な人と出会い、話をする中で、自分が持つ世界観や価値観がとても広がった。

(6) 今後について

英語力が伸びたとは言ったものの、英語はまだまだであると感ずることも多々ある。また今回、様々な人と話していて気付いたのは、自分の専門分野や目標について誇りを持って語っていた人が多いということだ。私は現在、農学部で有機化学や植物の栄養などについて学んでいるが、そのことについての説明や学んだ後どうしたいのかということが明確に決まっていない。英語はもちろん、自分がやっていることをきちんと説明できるようにもっと専門分野の勉強を頑張りたいと思う。

2.3.3 <GSP> オーストラリア・ブリスベンのアイアンサイド小学校訪問プログラム(AUS)

○発表者：永見 玲朗（国際人間科学部2年）

続いて、GSPより国際人間科学部2年生の永見玲朗さんが発表を行った。

神戸大学附属小学校では、昭和63年よりアイアンサイド小学校という協定校との間で、児童の受入れと派遣を1年おきに行っている。従来は、児童40名に対し代表保護者5名が同行する形で活動をしてきたが、今年度、GSPと連携し、初の試みとして国際人間科学部の学生6名が児童を引率し、7月末から8月初旬に約10日間行われた。永見さんの発表内容は以下となる。

(1) 参加動機

私は附属小学校、中等教育学校の卒業生で、まだ小学生だった2008年7月、第10回の訪問団としてこのプログラムに参加し、オーストラリアに行った。

その後、小学校教員を目指し、神戸大学発達科学部を受験したが失敗し、これが転機となった。翌年度のオープンキャンパスで、発達科学部は学部編成され、新学部では留学が必修となることが分かった。その際、附属小学校のオーストラリアの活動を引率するプロ

グラムがあることを知り、是非、国際人間科学部に入り、引率したいと考えたのが、今回のプログラムに参加した動機だ。

ただ、もともと目指していた小学校教員免許は、(カリキュラムの再編成等により、大学に入学してみると)私の学科(発達コミュニティ学科)では取得できなくなっていた。

(2) 本プログラム実施目的

附属小学校では、「国際的な視野を持ち、世界に拓かれた“グローバルキャリア人”としての基本的な資質を育成する」という教育目標に掲げている。そのため、小学生の学びとしては、このプログラムに参加し、国際理解教育を実践的に学ぶことを目指している。

また、大学生の学びとしては、多様性を持った社会を形成するオーストラリアの学校現場で、多文化共生に視野を開く子どもたちの学習を助けることを通じ、国際理解教育への認識を深め、今後のグローバル社会を担う子どもたちを育成する教員となるための資質を磨くということが目的になっている。

(3) 現地での活動内容

まず、ブリスベンでプログラム期間の半分以上を過ごした。その後、メルボルンへ行き、最後はシドニーで活動をした。

ブリスベンでは、アイアンサイド小学校の小学生との交流やホームステイを行った。

アイアンサイド小学校での活動スケジュールは、午前中は学校での活動、午後は動物園や自然公園、海などに行き、自然に触れる活動をした。

小学校では合同授業のほか、ウェルカムセレモニー、ホストファミリーとの対面式、フェアウェルパーティーなどの催しがあった。

ウェルカムセレモニーでは、日本の文化をオーストラリアの小学生に伝えるということで、企画や運営をし、ソーラン節、けん玉、お手玉など日本の習慣、小学生が日本文化を伝える活動のサポートもした。

合同授業では、参加している小学生たちが日本との違いや共通部分に気づいていく様子が見て取れ、また自分にとっては、日本との教育制度の違いなどに気づくことができた。

その後、メルボルンへ移動し、博物館や展示館などで社会見学や歴史的なことを学んだり、商店街などで生活感、生活様式を味わったりした。

最後に訪れたシドニーでは、フィールドワークを行った。学生1名と児童4~5名のグループを作り、事前にグループ内でフィールドワークの内容について計画を立て、実際に行動した。

また、現地での活動を引率するだけでなく、渡航前、渡航後の取組にも関わった。

渡航前に行われた事前学習では、「オーストラリアで何がしたいか」「何を学ぶか」という授業を小学生に行った。また、帰国後は、小学生が友だちや保護者向けに行う報告会の運営、実施を行った。

(4) それぞれの活動で工夫した点

今回、初めて小学生と触れ合う機会だったため、子どもたちへのアプローチに最初は苦戦した。このプログラムの場合、(自分の) 英語スキルを高めるような語学研修はなく、児童、小学生の英語能力を高めることが目的とされていたので、どのようにすれば小学生が英語能力を伸ばせるか、導く点に苦戦した。

また、メルボルンに行った頃になると、児童もかなりオーストラリアに慣れてくる。慣れる一方、はしゃぎすぎたりする子どもたちがおり、彼らにどのようにマナー、ルール、集団行動の大切さを指導したらいいかということ学んだ。他方で、ホームシックになるなど精神的にダウンしてしまう児童もいたので、そのような子どもの心のケアをどう対応していくかといったことも学べた。

グループ学習を通じて、大学生と小学生の時間の感覚の差異があり、計画どおり活動が進まないとき、子どもたちに「それは間違っているよ」、「もっと早く行こう」などと声をかけるべきか、はたまた彼らの能力を養うため、敢えてそこは口出しせず見守った方がいいのか、子どもへのアプローチについて体験的に学べた。

また、グループ学習は、今回の活動の中で児童と過ごす時間が一番長く、公共交通機関での移動中、食事中、宿泊先、あらゆる場が、小学生に小さな社会人としての能力を身につけるためのマナーやルールの指導やその伝え方を学ぶ機会になった。

そのほか、渡航前や帰国後にも子どもたちと関わることで、1つ1つの活動が何のために、どういう目的で実施するかをとっても考えさせられた。

(5) 活動成果

語学力、教職、国際理解教育、グローバルイシューの4つにまとめられると思うが、それぞれ相互に関係し合った部分がある。

例えば、語学力を取っても、自分の英語スキルや英語コミュニケーション能力を伸ばすのと並行して、どのようにしたらそれらを子どもたちが伸ばすことができるかを考え、教職に関する知識や資質も実地で向上させることができた。

また、様々な肌の色の子どもがいる教育現場を見たり、現地小学生が描く髪が茶色い、目が青いといった似顔絵作品を通じて、多国籍社会を感じたり、学校が開催する保護者対象の英語授業といった独自の取組などを知り、教職に関する知識向上だけでなく、国際理解教育の学びの場となった。そして、活動全体を通して、自ら考えたグローバルイシューに対し、どのように課題を解決するかということも行えたと思う。

(6) 今後の抱負

今回の経験から、やはり小学校教員を目指したいという気持ちが強くなった。例えば、大学院に進学する、あるいは中等高等学校の教員免許取得後、もう一度小学校教員を目指そうと考えている。

さらに、今回、海外の教育現場を見て、カラフルな教室、椅子のない教室など、授業スタイルも多様なことに感銘を受けたので、海外での教員ということも関心を持った。日本の

教育のみならず海外の教育についても学ぶなど、選択肢を考えてみたい。

ちょうど10年前にこのプログラムに参加し、その10年後に再度参加してみると、同じ景色のはずなのに、考え方、捉え方はすごく変化しており、同じ場所へ行く価値は非常にあると思う。個人的には機会があれば、10年後にまた行きたい。今回引率した小学生の中から同じような体験を志望する児童がでてきてくれたらうれしい。

2.3.4 グローバル・アクション・プログラム カンボジア研修

○発表者：荒池 歩（神戸大学附属中等教育学校6年）

河川 純（神戸大学附属中等教育学校6年）

最後に、2017年度のGAPで、2018年1月に、カンボジアのシェムリアップとプノンペンでの研修に参加した附属中等教育学校6年の荒池さん、河川さんが発表を行った。以下、二人が共同で行った発表概要である。

(1) 参加動機

（河川） 動機は2つ。小学校の先生になりたいという夢があり、カンボジアの現地で教育問題を学びたかった。次に、かねてから戦争と平和に関心があった。だが、戦争を経験していない私たちがどうすれば戦争を身近に感じることができるかと考えていた。実際に、戦争や大量虐殺のあった地に行き、その答えを探すべく研修に参加した。

（荒池） かねてから難民問題に関心を持っていた。附属中等教育学校の卒業研究でも難民をテーマに取り上げ、日本にも難民としてカンボジアから逃れてきた人がいることを知った。卒業研究の一環で訪問したJICAで元青年海外協力隊員から話を聞き、発展途上国にも関心を持つようになった。かつて難民がいた現在のカンボジア、そして発展途上国の現状を自分の目で確かめたいと思い参加した。

(2) 現地での活動内容

戦争や大量虐殺に関わる場所として、アンコールワット遺跡、トンレサップ湖、スナーダイ・クマエ孤児院、トゥールスレン刑務所、キリング・フィールドなどを訪問した。

アンコールワット遺跡では、遺跡内に内戦時の銃弾の跡が残っていたり、破壊されていたりと、歴史の傷跡が大きく残っていた。現在、日本や周辺諸国が支援し、破壊された遺跡の修繕などが行われているが、素晴らしい文明をも内戦は潰してしまうことを実感した。

また、トンレサップ湖は、かつて内戦から逃げようとしたカンボジア人、ベトナム難民などが水上生活を始めた場所だ。現在も4万人もの人が水上生活をしており、有名な観光地になっている。水上には商店、学校など生活に必要な施設が殆ど揃っており驚いた。

スナーダイ・クマエ孤児院は、創設当初、ポルポト政権による大量虐殺や内戦の後遺症によって親を亡くした子ども、農村部で貧困ゆえ、家族で養育できない子ども、身寄りのない子どもを預かっていた。現在は日本と同様、ネグレクトやDV問題などで預けられる

子どもたちが多数だ。

孤児院の運営には、日本人女性も携わっており、日本語学習や日本の掃除などの習慣を取り入れ、子どもたちの教育も徹底されていた。院内には日本語のポスターや物も多々あり、日本とカンボジアの繋がりや支え合いを感じた。

ポルポトは共産主義国家を目指し、当時の人口約 800 万人のうち約 300 万人の国民を虐殺した。特に反対する恐れがあった知識階級の人々、そして海外に留学していた学生までも殺した。トゥールスレン博物館はそういった知識人の刑務所として利用されていた。

ポルポトの虐殺は子どもたちなど多くの罪のない人々にも及んでおり、キリング・フィールドは当時の殺害現場であり、現在、亡くなった人々の遺骨が安置されている。

大虐殺のため、カンボジアの発展は衰え、子どもの数に対して先生の数が少ないなどの問題がある。しかし、現在のカンボジアの原点ともいえるはずのこの歴史について、国内では教育されていない。理由は、子どもたちが当時のポルポトの子孫をいじめることがないようにするためだ。子どもたちが歴史教育を受ける機会がなければ、また同じようなことが起こりかねないのではないかと、歴史教育が行われていないことに疑問を感じた。

教育現場を視察する活動としては、JICA の青年海外協力隊員が赴任している小学校やプノンペン日本人学校を訪れた。

現地小学校で交流した際、子どもたちの言語能力に驚いた。中には、英語だけでなく、日本語、中国語が話せる子どももおり、教育の質は高いように感じた。しかし、子どもの数に対して学校数が少ないため、授業は午前と午後の入れ替え制であるといった問題を抱えていた。

さらに、学校から一歩外に出ると、小さな船で生活し、貧しく学校に通えない子どもたちがたくさんいた。このような貧しい子どもたちも学校で学びたいと思っている。こうした貧富の差も問題になっている。

プノンペン日本人学校では、カンボジア＝地雷というイメージがあるが、近年、日本などの先進国の支援で地雷除去が進み、地雷の被害に遭うことは稀になっていることを知った。カンボジア＝地雷というイメージをまだまだ多くの人が持っていると思われるが、このイメージは間違っていると感じた。

(3) 帰国後の活動について

実際にカンボジアの空気を感じ、現地で様々なことを学び、この学んだこと、感じたことをほかの人に伝えていかねばならないと感じた。また、日本人がカンボジアに対し抱いている偏見を変えねばならないと感じた。

研修後、全校集会や文化祭、オープンスクールなど、様々な発表の機会をいただき、自分たちが学んだこと、感じたことを発表してきた。

特に文化祭やオープンスクールでは、たくさんの子どもたちが聴きにきたので、彼らにも分かりやすい説明やクイズを使ってカンボジアのことを発信した。

(4) 研修の成果と今後の抱負

(河口) 自分の意識や夢が変わった。今まで戦争や平和に関する映画や本、メディアによって得られる知識だけで、戦争や平和について知ったつもりになっていた。今回、実際に現地で経験した方の話を聞き、かつて大虐殺のあった地の空気を吸った瞬間、今までの歴史が目の前に現れ、本当の恐ろしさや平和や戦争の現実味を感じた。そして、自分自身が戦争や平和に対して、他人事になっている部分があるのだと気づいた。

また、研修前は漠然と小学校の先生になりたいという夢は持っていたが、研修を終えてその夢は鮮明なものへと変わった。

(荒池) カンボジアを訪れる前は、日本と真逆の生活をしていると勝手に思い込んでいた。しかし、都市部は、日本と変わらないほどの高い高層ビルが立ち並び、バイクや車が走っていて、想像とは全く違っていた。

しかし、少し都市部を離れると、物乞いをする子どもたち、家のない人、小さな船で水上生活をする人など、貧富の差が見えた。中でも、学校に通いたくても通えない子どもたちがたくさんいるということは、私にとって一番ショックだった。と同時に、日本で暮らしているというありがたみも感じた。

現地で出会った日本人やカンボジア人が口を揃えて「教育さえあればカンボジアは変えられる」と言われていたが、今回の活動を通じ、何よりも大事なものは教育だと感じた。

(5) 今後の抱負

(河口) 教育問題を全て改善することは大変難しいことだが、将来は絶対に小学校の先生になり、日本だけでなく世界の教育を受けられない子どもたちが教育を受けられるよう身を尽くしていきたい。

また、現地に行って学ぶことは本当に大切だと、今回の研修を通じて学んだ。今回で終わりにするのではなく、これからも広い視野を持って、新たな経験をし、もっと色々なことを発信していきたい。

(荒池) カンボジアに教育がないわけではないが、多くの問題を抱えている。大学では教育問題の解決について研究し、いつか発展途上国にいる多くの貧しい子どもたちが学校に通うための手助けをしたいと思っている。それまでは、自分の周囲の一人でも多くの人に自分たちの経験を伝え、多くの人が持つカンボジアに対する偏見を変えていきたい。

先進国で学んできたからこそ、何か彼らのためにできることがあると思う。

2.4 第3部 パネルディスカッション「海外での学びをどう活かすか」

第3部は、「海外での学びをどう活かすか」をテーマに、第1部で基調講演した4氏に加え、第2部で発表を行った学生・生徒5名をパネリスト、神戸GCPコーディネーターをファシリテーターとして、パネルディスカッションを行った。

本シンポジウムは「世界へ飛び出す学生たち」というテーマで学生の発表やポスターセッションを通じ、海外での学外学修のアウトカム（成果）を見てきた。そのため、このパネルディスカッションでは、学生・生徒に質問をし、直接、彼らの声を聞くことを中心に進められた。以下、当日の各質問に対する学生・生徒の発言概要を記載する。

(1) 海外活動を通じて、何を学びましたか。

(中山) 一番大きかったことは、目的を持って行動するということだ。私は化学をもっと学びたくて農学部に入学した。しかし、どんな職に就きたいか、なぜ化学を学び、その後どうしたいのかなどについては、あまりよく考えてこなかった。今回、インドで色々な人と話し、将来の夢、それに向かって現在、頑張っていることなどを聞き、私も将来、人の役に立てる仕事がしたいと思った。将来について改めて考えることができたことが一番大きかった。

(大家) 私は2点ある。1点目は、NGOの事業現場やネパールの学校の実情を見て、現場の力だけでは解決に至らない実情があるということだ。

2点目は、ストリートチルドレンについての経験で挙げたように、実際に目で見えるもの、そして肌で感じるものは想像を超えているということだ。教科書を読んだだけでは分からないことを海外実習で学んだ。

(荒池) 「現場に行くことの大切さ」を学んだ。教育が受けられない子どもたちがたくさんおり、教育が何よりも大切ということは、日本にいただけでは学べなかった。現場に行って自分の将来ややりたいことを見つけられたというのは大きなことだった。

(河口) 「実際に現地に行って勉強することの大切さ」と「柔軟性の大切さ」を感じた。現地では、知識がないと深く感じられないこともたくさんあった。現地でクメール文明の歴史を聞いた時も、世界史の知識がないとそのすごさなど理解できない部分があった。今、高校3年生だが、勉強は受験だけではないと思った。

もう1つの「柔軟性の大切さ」は、訪問した孤児院の女性が、自分の型を相手にはめるのではなく、相手は相手の型、自分は自分と、自分の型を相手に押し付けず、相手の型を認めることで、相手への無理解などがなくなると仰っていた。カンボジアへ行き、文化の違いなどで少し困った部分もあったが、カンボジアにはカンボジアの文化があり、自分の文化とは異なると思ひ、寛容に受け入れることができた。やはり柔軟性というのは大切だと感じた。

(永見) 一言で言えば、「教育の重要性」だ。教育は、やはりコミュニケーションにおいて一番基本的な背景であると感じていたので、教育や社会政策が、どのように人間形成の下地に関わるかということは学べたと感じている。

(2) (堀江氏からの質問) 今回の活動を通じ、次にさらに学んでいきたい、知りたいことは何でしょうか。または将来のキャリアの目的などが明確になっているなら、今、自分に足りないと思うことや、次にこういう経験をしたほうがよいといった点で、何か発見はありますか。

(大家) 日本の文化について知識が足りていなかったと反省している。現地では様々な国籍の仲間と共に行動することが多かったが、やはり会話はその国の文化など、その国に関することが多かった。アニメの話が話題になったとき、それほど知識がなかったので会話が盛り上がらなかった。その点でもう少し自国文化や歴史について学べたらと思う。

(永見) 多国籍多文化社会で過ごす中、日本人は相手を尊重する姿勢など多く持っていると感じたが、一方で、個人の意思を伝えたり、主張したりする力が、自分を含め、日本人は少し劣っているかと感じた。協調することは必要だが、自分の意思をしっかりと伝えるという部分は、今後、身につけていかねばならないと感じている。

(河口) 現地に行ったとき、知識が不足しているところがあった。また、伝えたいが伝えるツールがない、相手にうまくニュアンスを伝えられないことが多々あった。このようなときのために、英語など話すツールや知識をきちんと身につけるとするのは今後の課題だと思った。

(3) 海外での活動を通じ、苦勞したこと、つまずいたことは何ですか。また、それに対して自分なりにどのような工夫しましたか。

(中山) 英語で簡単なコミュニケーションはできるが、深い話になったときについていけないことがあった。もっと英語が分かったらより世界が広がっただろうと思い、悔しかった。この状況に対しては、笑顔で挨拶をしたり積極的に自分で英語を話したりするようにした。また、分かっていないことはきっちり「分からない」と言うようにした。最初はついていけない会話でも笑顔でうなずいていたが、そうすることで、周囲も英語を教えてくれたのでよかったと思う。

(河口) ショックだったのは、現地の小学校に行ったとき、小学生の方が英語を話すのがうまく、相手が話す英語が全然分からないときがあり、話せないで少し引いてしまうこともあった。ゆっくり考えたら、コミュニケーションを取るのはしゃべるだけでなく、ジェスチャーや表情、絵を描くなどして、コミュニケーションを取った。やり方は1つではなく、色々なアプローチがあるというのを学び、それで困難から立ち直れたかと思う。

(永見) 小学生に英語指導をするとき、どういった方法でその力を見つけさせられるのかという点が一番苦勞した。例えば、ある生徒が「おなかが空いたからリンゴが欲しい。

先生、言って」と言われたとき、私が言ってしまえば、その生徒の英語能力を伸ばすことにならない。また、「こう言うんだよ」と言ってしまうと、それは、その生徒が私の言ったフレーズを単に復唱するだけになる。「リンゴという単語は、apple だよ」というように伝え、あとは本人に考える余地を与えるなど、どのように導くか工夫を続けた。

(4) 海外での学びを今後どのように活かしていきますか。あるいは、今、どのように活かしていますか。

(中山) 先ほど人の役に立つ仕事がしたいと話したが、化学でどう人の役に立つのかということを考えました。インドでは、農薬がたくさん使われている野菜や着色して、おいしそうに見えるように作られている野菜が問題になっていると聞いた。そこで、私の専門分野では、低価格で安心できる野菜を頑張れば作れるのではないかと思った。みんなに安心を届けられるよう、化学分野で社会貢献ができる仕事をしていきたいと思っている。

(大家) 私の場合、このネパールでの経験が、直接キャリア選択に活かされた例なので、大変感謝している。新聞記者にとってやはり一番大切なのは、現場を踏むことだと言われる。どんなに文章がうまくても、1枚の写真には勝てないとよく言われるので、将来、新聞記者になったら、現場を大切にしたいと思っている。つらい現場もあるかもしれないが、それから目を背けないでしっかりと当事者の目線に立った記事を書きたいと思う。一方で、現場を踏むことで明るいニュースもあるかもしれないので、そういった部分もどんどん発信していきたい。

(荒池) 現地の教育制度で、音楽や美術といった芸術系の教科は必修カリキュラムに含まれていないということを知った。私は4歳からピアノを習っており、音楽を活かした職業に就けたらという思いが以前からある。また、発展途上国に関わりたとも思っていたので、カンボジアの教育事情を知り、音楽を学べる環境を作りたいと思っている。1番ショックを受けたのは、学校に通えない子どもたちがいるという現実だった。そのような子どもたちのために何かしたいと思っている。

(河口) 先にも述べたように、私は小学校の先生になりたいという夢があり、ただそれは、カンボジアに行く前は漠然とした夢だった。カンボジアで、学校に通える子どもたち、通えない子どもたちがいるという光と闇を目の当たりにし、実際にその差をなくし、どの子どもたちも教育が受けられるような支援をしたいと思っている。渡航前は、その支援方法として、現地に行って先生をするというイメージしかなかったが、今回、現地へ行き、教育支援もいろいろなアプローチがあると知り、現地での教員養成というのも携わってみたいと思った。

(永見) 池田氏が講演で挙げられたグローバル人材に求められるものや、堀江先生が仰っていた留学で身につくスキル、こういったものを兼ね備えた、附属中等教育学校で使っ

ている言葉を使えば「グローバルキャリア人」になることを、まずは自分が社会に出るまでに目指したい。その後は教育を学ぶ者として、教育は大事だと感じるので、小学校教員ではなくても、学芸員といった社会教育の関係者など、何らかの形で教育者を目指せたらと思う。

(5) フロアからの質問①

神戸大学には様々な国からの留学生が多く在籍しているが、皆さん、海外プログラムから戻って来て、留学生への接し方など何か自分が変わったところがありますか。

(中山) 留学生と交流をするという活動はしていないが、海外体験を通じ、英語がそれほどうまくなくても話しかける勇気がついた。自販機の前で外国人に話しかけられ、会話をしたということがありました。これは、海外で、一人で生活したからこそ身についたスキルかと思っている。

(大家) 私のゼミで昨年度、留学生を受け入れていた。日本人とは異なる意見やその国の人間なりの見解があった。意見や見解、生きる道が違っても、大きな目標を見失わないことが大事だと留学生から学んだ。

(永見) 個人的に海外経験が豊富だと自負しているので、今回、特別に激変したことは見つからないが、海外の人と触れ合った際のストレス感とか、何か問われた時、ただ求められる返答だけをするのではなく、その人がもっと知りたいと思うような会話をもっと楽しみたいと思っている。文化が違ふとどうしている人なのか、その点に関心が湧くようになったと思う。

(6) フロアからの質問②

海外にいと自分にはないものが見えてくると思いますが、日本にはないもの、あるいは神戸大学にはないものも見えてくると思う。今回、それぞれ教育プログラムを経験し、神戸大学に対し、こういう教育プログラムがあったらいいのでは、こういう授業が足りていないのではないかとこのものがあれば、教えてください。

(河口) 帰国後、学習プログラムとして全校集会などで研修について発表をしているが、実際に大学に行ってそれがどう活かされるのか、そのような点を知りたい人が私たちの仲間がたくさんいると思う。GAPに参加してみたいと思っている人はたくさんいても、参加という形で行動に移す人が少なかったり、まだ知識を伝えられていなかったりする人がいるので、実際にGCPなどのプログラムに参加した人たちが、附属中等教育学校に発表しに来ていただけたらすごくいいかと思う。

(荒池) このような海外プログラムは、どこの大学にもあるわけではないと思うので、

GCPのような、自分のキャリア選択に繋がるような経験ができるプログラムがいろいろな大学にあればいいと思う。

(中山) 農学部のコースのように、海外で交流できるような機会が増えればいいと思う。

2.5 総括

パネルディスカッション後、神戸 GCP 実施責任者である阪野智一教授より、次のとおり総括と今後の展望が述べられた。

海外学修の成果について、何らかの化学反応は確実に起こっていることは、学生の発表などで既に明らかである。

このようなプログラムの下地として、以前、展開していた「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援事業」がある。この事業の時から、本学の特色を出すために、一般的に言われる、「課題解決できる人材」から、さらに一步進んで「課題自体を発見する」人材を育成することを目指していた。それは AP にも反映しており、学生の学修効果を振り返ると、大学のグローバル人材育成の取組は効果を生んでいるのではないかと思われる。

その反面、成果が出ていない点として、3点挙げられた。

1点目は、毎年春と秋に行われる“神戸 GCP フェア”などを通じて、活動成果を発信し、学内ではそれなりにこの取組が知られるようになってきていると思われる。一方、社会へ向け、本学がどのような取組をしているか、もっと社会へ発信する必要がある。

次に、神戸 GCP は1・2年次を対象としており、ここでの学びを専門の学修にどう繋げるか、あるいは留学や海外インターンシップといった長期学外学修にどのように繋げるかという点を挙げられた。上位学年で留学に行くので神戸 GCP に参加しない、1・2年次に神戸 GCP に参加したので留学はしない、といったことがないように、1・2年次の海外の学びと上位学年での長期学外学修での学びが相乗効果を発揮できるつなぎりにするための何らかのカリキュラム、仕掛けが必要だと述べられた。

そして最後に、本事業は来年度、最終年度を迎え、補助金が終了する。そこで、どのようにプログラムを継続するかという課題について触れられた。特に、神戸 GCP は全学プログラムであるので、この火を落とさない形で継続の道を模索しなければならないと述べられ、シンポジウムは閉会した。

2.6 ポスターセッション

第1部終了後、会場横のホワイエにて、ポスターセッションを実施した。

神戸 GCP に加え、GSP、GAP の各プログラム計 15 コースが、それぞれの学外学修活動やその学修成果をポスターで発表をした。

また、ポスターセッションに出展した学生・生徒が、来場者へ現地の事情や活動内容を説明し、質疑応答も活発に行われた。以下に、ポスターセッション出展コースを記載する。

<神戸 GCP>

- ・グローバル都市ニューヨークのコミュニティと文化を学ぶ（ニューヨークコース）
- ・アジア・フィールドワークコース（スラウェシ・プログラム）
- ・フィールドワークチャレンジコース・マレーシア
- ・ハンブルク異文化理解コース
- ・理学グローバルチャレンジ Nanyang/Sci コース
- ・グローバルチャレンジコース（学生企画型）・ネパール
- ・グローバルチャレンジコース（学生企画型）・アメリカ
- ・グローバルチャレンジコース（学生企画型）・ベトナム/ハノイ
- ・グローバルチャレンジコース（学生企画型）・ベトナム/ホーチミン
- ・グローバルチャレンジコース（学生企画型）・カナダ
- ・インターンシップチャレンジコース・インド
- ・インターンシップチャレンジコース・ベトナム
- ・ボランティアチャレンジコース・ネパール

<GAP>

- ・カンボジア研修

<GSP>

- ・オーストラリア・アイアンサイド小学校訪問プログラム

2.7 参加人数等

シンポジウムには、事前申込者、当日参加者合わせ約 100 名の参加が確認できた。

3. シンポジウムの成果

神戸 GCP では学外学修活動と学修成果に関する発信を、これまで学内向けに年 2 回開催する“神戸 GCP フェア”で集中的に行っているが、学外向けには大学イベントや大学広報誌で僅かに紹介するに留まっているのが現状であった。

今回、本学のグローバル人材育成に向けた本学の特色あるプログラムに参加した学生による学外学修活動と学修成果の報告発表を軸にしたシンポジウムを実施することで、主催者の予想を超える反響があった。今回の成果について 2 点述べたい。

3.1 学外への発信

反響の大きさは、当日のアンケートからも読み取れる。

「印象に残ったプログラムについて」（複数回答可）の質問に、回答者の 76%が「プログラム参加学生による発表」を挙げ、その後、「基調講演」（52%）、「パネルディスカッション」（31%）、ポスターセッション（28%）と続く。

学生の発表が印象に残ったとする理由として、一般参加者、大学教職員から次のような回答を得た。以下に、一般、大学教職員のコメントと分けて一部を記載する。

<一般参加者>

- ・経験から学ぶ教育の価値について考えさせられ、今後の課題になっていくと思った。
- ・様々なプログラムで、学生がいろいろな学びをしてきていることに感銘を受けた。
- ・このプログラムの可能性や影響の大きさを感じ、すばらしい活動だと分かった。

<大学教職員>

- ・実体験に基づく発表には「力」があり、大変良かった。
- ・実際の経験の質が優れていることを確認でき、プログラムの価値を確信できた。
- ・プログラムに参加した学生さんが成長していく過程がすごく感じられて良かった。

今回発表のあった学外学修活動は、座学ではなく、学生が学外学修先で主体的、実践的に活動に取り組むことを目的に行われている。参加した学生・生徒は、現地の知見を深めるだけでなく、あらゆる事情が日本と異なる現場での活動を通じ、困難なことに直面したり、現場の問題を発見したりする。個々でその困難なことを乗り越え、現地事情を理解する過程で新たな学びや気づきを得、次の行動へ繋げていく。そして活動後、その経験を足掛かりに自分の新たな境地を拓こうとする。

これらの反響から、学生・生徒の発表、パネルディスカッションでの発言はそのような学生の成長過程を明らかに示すことができたと考えている。

また、本学では多数の海外プログラムを実施しているが、これまでこのような学生の学外学修の学びの成果を社会へ発信してこなかったと思われるため、本シンポジウムを通じ、本学が目標に掲げる「課題発見・解決型グローバル人材」の育成の重要性を学内外へ発信したことは、意義が大きい。

3.2 国際的なフィールドでの多様な学外学修活動についての成果の確認

本シンポジウムにおいて、報告発表だけでなくパネルディスカッションでも、学生・生徒は、プログラムへの参加が学びを深めていくきっかけとなり、将来を見据えることになったと明瞭に述べている。

発表やパネリストを務めた学生・生徒だけ特別な成果を上げているのかと言うと、決してそうではない。その他の神戸 GCP 参加学生も、本シンポジウムの発表学生・生徒が言及した点をはじめとし、様々な学びや気づきを得、その後の学生生活に繋げている。

神戸 GCP で展開される学外学修活動が、参加学生にとって、社会で必要とされるソフトスキル、コミュニケーション能力、渡航国・自国双方の文化・習慣などへの理解や知識を

持つことの重要性を認識し、向上させる契機となり、さらにキャリア形成面で将来の選択肢に広がりを見出す機会となっている（友松，杉野 2018:140-147）。

主体的に活動を行う多様な学外学修は、「課題発見・解決型グローバル人材」の育成に着実に繋がっていると考えてよいであろう。

3.3 今後の課題と展望

当日アンケートのコメントでは、一般参加者、大学教職員双方から、本シンポジウムで取り上げた学外学修プログラムについて、「必要不可欠なプログラムと考える。さらなる活動強化に尽力願いたい」、「継続してほしいと強く感じた」という声が散見された。

このような学外学修プログラムを一過性のものとして終わらせるのではなく、本シンポジウムの総括でも言及されているように、持続させることが何よりの優先課題であろう。

また、神戸GCPは、プログラム初年度に2年生だった学生が、今年度、卒業年次を迎える。参加後のそれぞれの動向については現在調査中であるが、本プログラムに参加することで、その後の学生生活にどのようなインパクトを及ぼしたのか、長期的な学修成果についてデータを収集することも必要である。これまで以上に変化が加速する時代にあって、この分析結果に加え、教育界・経済界などからの期待されることや要望も加味し、本学としてどのように新たな学外学修プログラムの開発をしていくか、そしてさらなるグローバル化に役立てていくのか、検討を続ける必要がある。

その他、今回、講演者やフロアから、「大学生や高校生にもこのシンポジウムの話を聞いてもらった方がよい」との声もあった。

低年次で主体的に取り組む学外学修へ参加する意義を、より多くの大学生、高校生を認識してもらうには、活動に参加した学生による発表機会をますます広げていく必要がある。

アンケートにも「現地での体験を『発表』の形にまとめ上げることにより、その体験内容もより深まっていくことが分かった」というコメントがあった通り、参加学生は『発表』のために活動体験を振り返ることで、その時点の自己を見直し、新たな気づきを得、さらなる主体的な学修や活動へのモチベーションとすることができる。

ただ現実には、活動成果報告の発表を行う機会には限りがある。これを打開するには、第3部でパネリストを務めた生徒が希望として述べたように、附属中等教育学校と連携、また本シンポジウムのようにプログラムを超え、学内外の学外学修プログラムと連携し実施するという方法も考えられる。

学外学修活動での学修成果をさらに培うために「発表」という形で、学生が学生・生徒へ発信する機会を作ることは、学生の主体的取組を促進するだけでなく、今後、大学生、高校生がこのような学外学修活動へ関心を高め、参加をさらに促進することができる。と考える。

最後に、本シンポジウム実施にあたり、基調講演や報告発表、パネルディスカッションのパネリストを務めてくださった4名の講師の方々、5名の学生・生徒の皆さん、そして準備、運営に携わってくださった教職員の方々へ、この場を借りて改めて感謝申し上げます。

参考文献

友松史子、杉野竜美（2018）「神戸グローバルチャレンジプログラム実施状況と成果 - 大学教育推進機構コースを中心に -」神戸大学大学教育推進機構『大学教育研究』第26号、pp.131-147.

（文責 友松史子）